編集室から

先月は、我が家の稲刈りに始まり、出張が立て続きかなりのハードスケジュールでした。

特に世間がシルバーウィークという辺りからほとんど地元におりませんでした。その中で高校の同期会で小樽、大学の男子寮の廃寮を控えての卒寮生の大集会など、個人的に大変楽しい行程もありました。

この時期大変過ごしやすく、北海道とも気温差が余りなかったため着替えや体調的にはラクでした。

ところが、10月の声を聴くという段になって急に気温が下がり始めたようで、これまでとおりのつもりで居ると、體をウッカリ冷やしてしまうかもしれません。ご注意ください。

秋の日はつるべ落としと申しますが、日の暮れるのも早まるとともに、あっという間に冬を迎えることになるのかもしれません。既に気の早い予定として師走の日程照会が始まりました。

そうやって、時間だけが猛烈な勢いで過ぎ去っていく日々の繰り返しでは、何のために生まれてきたのやら考え直し、見つめなおす余裕もなくなってしまうようです。

先延ばしになってしまっている「やりたいこと」、いつかやろうと決めてはいるものの手が付けられていないこと、ほんの僅かでもよいので何か始めてみませんか？

目先のことに全ての意識と時間を取られていると、目先の処理しかできず、その先にはやはり「目先のこと」しか現れないはずです。

大きな転機とは、小さな一歩から始まるものなんだと思うのです。（は）

明日裡空

Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川畠さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。
上京された際、ご利用になってみてください。
もちろん、川畠さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara
03-6427-8183
17:00～24:00
金曜17:00～28:00日曜祝休
渋谷区道玄坂2-19-3
ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。
その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

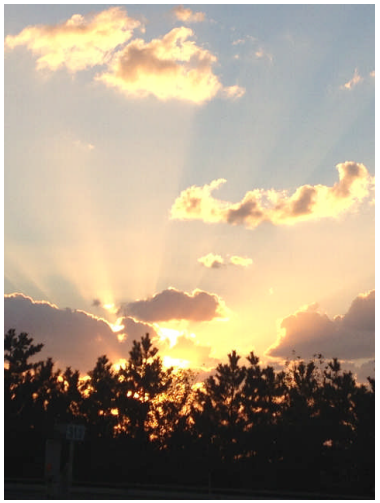
2015/10
(株)アスリック
http://www.neting.or.jp/usric

〒920-1167
石川県金沢市もりの里1-149-302

電話　076-233-7217
Fax　076-233-7375
Email　usric@neting.or.jp

2015/10
(株)アスリック
http://www.neting.or.jp/usric

神無月



能登半島・羽咋市にて
by hama

濱のつぶやき　『ある手術』

齢八十になる母が股関節の大手術を決断した。

家事全般を母に任せ切りである父の世話のためにも、余生の不自由を解消したいと。母は、長女であり、その母（私の祖母）が健在であることも何処かで影響しているのかも知れない。

母は、三十年ほど前にも一度股関節の手術を受けている。当時の医者のミスで本来無用な再手術を受け、難儀したらしい。その辛い記憶を乗り越えて再び臨む今回は、ある種の挑戦でもあると思う。

◆◆◆

人間は、身体を通じた言動で、外部に影響を与える。つまり言動は、自らの意志の表現でもある。

だとすると、人間とは「意志→言動」の繰り返しの中から、何かを表現し創造し続けている存在だ、とも言える。その最たるものが何かへの挑戦ではないだろうか。自分で目標とする状態への移行を意志決定することから始まり、「それを行動に移す・何がしかの結果を得る・目標に至る方策を模索する・行動を修正する」を積み重ね、目標に近づこうとする姿勢。それが他人から見て挑戦と見えるのだろう。

マラソン未経験者が突如、本格的なマラソン大会への出場を決め、しかも驚くべき記録を出すというように、他人にとっては、従前の状態と事後の結果（目標）の質的な差が大きく、しかも短期間に成し遂げられた挑戦であればあるほど、それは劇的に写る。

平均的に算定される余命がそれほど長くはない歳であっても、全身麻酔や過去の体験の怖れを乗り越えて、QOL（人生の質）を求めて手術を決断し、それに臨むことは、その後の人生を創造する勇気ある挑戦である。挑戦・創造を放棄して、愚痴・泣き言・不平不満を垂れ流して暮らす生き方への永訣でもある。

◆◆◆

手術とリハビリで約一月間の入院となる母に対して、その間独りで生活しなければならない父の日々もまた、挑戦だ。料理ができない父のために、母が大量に取り寄せたレトルトの惣菜を、湯を沸かして食べられるようにする。ご飯を炊く。洗濯して干し、取り込んで収納する。風呂を沸かす…。それまで妻に頼りきりだった家事全般をこなさなければ、自分が窮する。

「これからの男は家事もできなければ」と、幼少の頃から母に仕込まれた自分と違い、八十半ばを過ぎて、身体に色々と不自由を抱えながらも、いきなり未経験の仕事を覚えなければならない父も、また挑戦者だ。

◆◆◆

術後のリハビリ・日々の家事。ともに小さな「今」の積み重ねだ。

人は、過去の記憶に拘泥すると、後悔や「ああすれば良かったのでは」という迷いに囚われる。

逆に、未来の不確定さに意識がはまると、不安や「どうすれば良いのか」という迷いに囚われる。

「結果を出すアスリート」養成のための最新のスポーツ応用心理学が説き、禅をはじめとして原始仏教でも共通して説かれていたこと。それは「今に生きる」である。

過去の後悔と「今」との落差は、自らの成長の程度を示す。同時に、未来への不確定性と「今」との落差は、可能性の大きさを示している。それ故に、いずれにも囚われず、今なすべきことに集中して向き合う。これが結果につながっている。

◆◆◆

一方、日々の暮らしの雑事にかまけ、時々刻々目先の事に縛られて時間だけが過ぎていく人生では、永遠に目先の延長に過ぎない。最終的に何も起こらないだろう。

「今に生きる」と同時に、挑戦すべき目標・ビジョン、つまりは「人生の創造」が要る。目標を設定し、それに向かってひたむきに「今を生きる」。その生き方自体が挑戦的・創造的人生なのだ。

地球上で、新たな創造ができる生物は、唯一人間だけである。つまり創造とそれへの挑戦は、人間にだけ与えられた、言わば「持って生まれた性質」なのである。

目標自体の大小・質は、問われない。目標を立てること自体が意識の創造だ。小さな目標をひとつずつクリアし、人生を創造していく過程で、より大きな挑戦してみたい目標が姿を現すかも知れない。

◆◆◆

日々の雑事に追われる生き方から、より人間らしい創造的・挑戦的生き方にシフトするには、一度立ち止まるしかない。

本当は、何がしたかったのだろうか？「大人になる」という社会適応を求められる過程で、何を忘れ・見ないように隠してしまったのだろうか。それを見つけようとする意思を持つことからしか始まらない。そうすれば、今の生き方の延長線上に、それがありそうなのか、その種が見つかりそうなのか、それ自体もやがて見えてくるだろう。

ねずみの車回しも、一度止めなければ、逆回転はできない。

しかし、順風満帆で人生の歯車が回っている時に、その歯車を止めたいと思うことは殆どないだろう。

事故・重大なハプニング・怪我・病気・大切な人との別れ…。これまでのように歯車が回らなくなるこれらの出来事が起きて、初めて人は立ち止まらされる。そして、人はそこから模索を始め、ようやく一縷の光を見出し、それら向かって歩みだす。次の人生のステージは、そうやって登場する。

だとすると、これらの一見良くないと感じられるでき事は、より善き人生のための転機を与えてくれた大いなる一旦停止信号なのではないか。身の回りに、良くない出来事が生じたとき、そう捉えられた瞬間から、新たな挑戦と創造が始まるのだろう。

人生における良くない出来事とは、不平・不満・愚痴・泣き言で満たされたこれまでの生き方、表面的な満足で留まり本当に求めていた世界とは違う生き方との永訣を迫り、挑戦と創造の積み重ねの末にしか獲得できない輝かしい成果という果実への道程を暗示している可能性を見出せるかどうか。

先ずは、この点に掛かっているようだ。

◆◆◆

ただし、目標設定・コツコツ型の注意点は、ガンバル教に、憑り付かれないことだ。ついつい頑張り過ぎてしまう気性が、遺伝子的に刷り込まれているのが日本人。スポーツ応用心理学でも、楽しみながら取り組むことで、心の状態が融通無碍になり結果的に成果が出せると説いている。成果目標を設定しつつも、それを出すこと・達成することにのみ囚われると逆に成果が出せなくなるというジレンマに陥るという。

やりたいからやる。そんな挑戦が真の創造性を産むのだと、手術室へと向かう母を見送りながら確信していた。

きただより71　　弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『 北海道新幹線開業に向けて（3）～北海道木古内駅～ 』

ＪＲから、北海道新幹線（新青森～新函館北斗）の開業日が2016年３月26日、運行本数が新函館北斗～東京が10往復、新函館北斗～仙台、盛岡、新青森が各１往復の計13往復と発表された。最速列車では、新函館北斗～東京が４時間10分で運行される。いよいよ開業まで半年を切り、目前になってきた感がある。

このシリーズ３回目の今回は、北海道新幹線の玄関口となる木古内駅について、筆者が2013年12月に木古内町に立ち寄った時に得た知見と現在の状況を織り交ぜて紹介する。

現在の津軽海峡線で青森側から青函トンネルを潜り、北海道に入り停車する駅が木古内駅（上磯郡木古内町）である。木古内町は、函館市から西に約40㎞に位置し、人口4,577人（平成27年８月末日現在）を数える。町の人口は1955年の13,484人がピークであり、約３分の１になった。新幹線停車駅としては、「きただより67」で紹介した奥津軽いまべつ駅がある青森県今別町に次いで２番目に人口が少ない。

木古内町で有名なものをあげると、まず１月15日に行われる約200年の伝統を誇る「寒中みそぎ祭り」（みそぎ浜）がある。これは４人の行修者がみそぎ浜で別当、稲荷、山の神、弁財天の４体のご神体を潔める神事であり、約5,000人の人出がある。また、戊辰戦争で敗れた仙台藩士らが咸臨丸で仙台から小樽に向かう途中、木古内のサラキ岬で座礁し、咸臨丸終焉の地とされている。現在は、咸臨丸ゆかりのオランダから直輸入した約80種５万球のチューリップが咲く「サラキ岬チューリップ園」が整備されている。

木古内駅前には、町の観光交流センター「みそぎの郷きこない」が整備され、農協女性部による産直施設「きこりろ」が駅前に移転した。木古内駅から南にまっすぐ延びる道路沿いの商店街は、20数年前に訪れた時に比較し商店数が大幅に減少したが、「駅前通商店街景観統一事業」で「地元スギ材を使用した駅前商店街の景観統一を図っていた。特に東出酒店は、スギ材の店舗と道産米による限定酒「みそぎの舞」の暖簾が目をひく。

木古内は、2013年12月に廃止された江差線（木古内～江差）、1988年の青函トンネル開通時に廃止された松前線（木古内～松前）が分岐する鉄道のまちでもあった。木古内駅の駅勢圏は、渡島、檜山地方の９町に及ぶ。青函トンネルの開通に次ぐ、今回の北海道新幹線開業に寄せる交通の変革に寄せる木古内町をはじめ渡島、檜山地域の期待は大きい。

集客の中心は、ビジネス需要がそれほど見込めないため、量が少ないとはいえ地域住民の需要の掘り起しと観光に期待することにならざるをえないであろう。近隣に函館という超有名観光地を控え、観光客にどれだけ木古内に降りてもらい、新しい観光商品の開発や伝統的な観光地である江差、松前を含めて呼び込めるかが課題である

また、北海道新幹線開業に伴い江差線（木古内～五稜郭）は、並行在来線となるため廃止となり第３セクターの道南いさりび鉄道（本社　函館市）として開業する。今後も沿線人口が減少の一途が予測されるなか、また、将来的に北海道新幹線全線開業時には函館本線（新函館北斗以北、小樽まで）の第３セクター化が想定されており、こちらの運営、持続なども北海道や沿線地域が背負っていくことになり大きな課題である。

『 書くネタが乏しいので 』
株式会社GARBAGE代表　川畠　嘉浩

と最初にいい訳をさせていただきます。新規出店候補先を横取りされたこと、5年使ったPCが壊れたこと、お気に入りのカーディガンを酔っぱらってどこかに進呈してしまったこと、髭を剃ったら3カ月の息子が父とわからず泣きじゃくること等々この一カ月いろいろあったのですがここで書くには帯襷で、、、、、。

ということで、今回は晩婚化・少子化に対して飲食店ができることについて考えてみたいと思います。決して悪ふざけや投げやりではありませんのであしからず。単に興味があるだけです（笑）。

飲食店をやっていると、いろいろな方々と店主、お客様という関係を通して知り合い仲良くなる事が多々あります。中には、十年来の友人かのように月に何度もプライベートで食事をともにする仲間もできたりします。ですが、これがお客さん同士となるとそうはうまくいかないようです。

今、都内の主要な有楽街では“相席屋 (あいせきや)”という名称で素人の男女の出会いを提供する居酒屋が盛業のようです。システムとしては、

・男性が30分飲み放題で1,500円。女性客は無料。
・男性客は来店後に席につくと、女性同士のお客さんから指名があれば相席になれます。
・相席となった男性客は女性客の飲食代はご馳走する。

ざっとこういうシステムです。

開店前には男性客で行列ができるほど今人気のお店です。しかし、実態を聞くと女性が単にタダ飲み・タダ食いをしたいがために訪れるケースが多いらしく男性客の間では「あそこに行っても出会いがないどころか、単にお金を取られて終わり」という噂が蔓延しているようです。それでも行ってしまうのが男性の悲しい性なのかも知れませんが。私から見ても、キャパクラや出会い喫茶といった風営法の対象となる業態ととどこが違うんだ?と思ってしまいます。そのうち規制の対象になるでしょう。

私の店の場合、石川県や北陸のお客様の比率も高いので、地元話に花が咲いてみたいな事もあるのかな?と想定していましたが、実際お店では盛り上がるのですが『素性を知らない他人とコミュニケーションを持つのは、今共有しているこの場だけでいい』というのが特に女性側の認識のようです。

では、どうすれば飲食店が健全な出会いの場を提供できるか!?お店側が積極的にお客さん同士を巻き込んで、店の外も活動できるコミュニティ形成をするしかないかなと。例えば、次の新業態が北陸の商材をなんでも炭火で焼いてしまうという業態なので

・市町村コミュニティをつくる⇒おらが街ノートをつくる。
・市町村対抗のイベントを開催⇒体育祭、食祭等

つまり、何か近しいアイデンティティを持っているという安心感が大切なのかもしれません。でも、それを飲食店がやるって大変だ。

『富士の国から　～大魔神のたび～　』九州視察の旅(6/27～30)その２

静岡県小山町まちづくり専門監　溝口　久

今夜の宿は行きつけの農家民泊の宇佐市安心院町にある舟板昔ばなしの家、中山ミヤコさん宅だ。いろりを囲んで旬の野菜を使った料理が出るは出るは 特にお気に入りはドジョウの唐揚げだ。地元で養殖されている。ご飯は鳥の混ぜご飯のむすびだ。すでに満腹、とてもお腹に余地はない。翌朝に持ち越しだ。

朝食後に由布院に向かった、車で30分も走れば着く、この日は第18回ゆふいん文化記録映画祭の日だ。小生が由布院勤務を終えた年に始まった。中谷健太郎さんがQさん、ドキュメンタリーの映画祭やろうと思うんだけど、どうじゃろうか？イベントには結構事務局職員の手を取られるし、休日出勤もさせなくてはならないので、渋い顔見せたら　いいんだ、やりたくなきゃ　一人でもやるぞ　健太郎さんはやると言ったら、そこにはバックギヤもブレーキもない。あれよあれよと由布院の中に三本目の映画祭を立ち上げてしまった。

スタートは有志が始めるのだけど、いつのまにやら若手に実行委員長を譲り、地域の祭の色合いを出していくために、映画祭の交流会場を温湯区の公民館にして、壁には一面、花の御礼として寄付者の名前と金額を書いた半紙が貼られていく。さすが、健太郎さんである。映画祭の会場に、交流会の場には九州大学はじめ多くの学生がボランティアとして参加している。その若さがどちらかというと地味な文化記録映画祭を華やいだものに変える。

我が町小山町でも昨年、映画祭が始まった。ここは専属のロケサポート職員の活躍もあって、ロケ現場にされることが多い。そこで博士の愛した数式をはじめロケされた映画を観る第一回映画祭がひっそり産声を上げた。今年も開かれるか定かではないけど。由布院の伝統ある映画祭には遠く及ばないけど、素朴さ、手作り感は満載、開催の折りには是非観に来て欲しい。

交流会場にはななつほしin九州のデザイナーの水戸岡鋭治さんもＪＲ博多シティの丸山社長、静岡県の世界遺産センター設計の建築家坂さんも森まゆみさんもいて、楽しくお話しさせていだいた。もちろん、由布院のかつての同志達ともね。夜深くなった頃、宿に戻り気絶するように床についた。

翌日は信田さんが佐賀県みやき町に送ってくれた。ここで我小山町長と町長戦略課長と合流した。ここから、本番の視察のはじまりはじまり。

みやき町でお相手をしてくれたのは福島主幹。PFI事業をやることになったいきさつから、手順をこと細かに説明してくれた後、完成した町営住宅のいちご館とトマト館に案内してくれた。今年度、さらにオリーブ館を三棟造ると言うのだ。何故、果実の名前をつけるの？子育てしやすさナンバーワンと言ってる手前、子供たちに慣れ親しみやすい名前とした。いちごとトマトの産地でもあるし。ではオリーブは？町長がこれから増やそうとしていて、子育て・婚活の丘「四季彩の丘みやき」には町民オーナーのオリーブの樹を植えつつある。各家庭にもオリーブの樹をプレゼントし、実った果実は町が回収しオリーブオイルにして一部を返す。町民がオリーブをつくり、町がオイルに加工し売る仕組みをつくる、所謂六次産業化の取組だ。

この町に下水道事業はないが、もちろん汚水、雑排水の処理はする。合併処理浄化槽を各戸に付けている。どこの自治体も設置に対し補助金を出すことをしているが、ここは違う。町が浄化槽を各戸に設置し、使用料を徴収するやり方だ。しかも設置からメンテナンス、使用料徴収まで民間がやるPFI方式でやると言うのだ。水道事業も荒尾市では一括PFIだ。

こうしたことができるのも、民間企業の企業責任が昔に比べはるかに高くなっていることが前提にあるだろう。収入が伴う事業は採算性をシビアに行動する民間にやっていただくことが肝要だ。武雄市のスターバックスを入れた図書館は特に有名だ。TSUTAYAが運営している。建てるところから運営者が関わらなくてはどんなにいい建物ができても、魂入ったものにはならない。設計から施行、運営から管理まで一体的に任せるPFIの意味はここにもある。行政は気の効いた発注と監視が仕事になる。むろん人員削減にもなる。企業の人員削減に株主は喜ぶけど、多くは暗いニュースとして報道される。一方、行政はよくやったと言うことになる。

先導する町長は58歳、六期目。30歳代から町長だ。決してど田舎の町ではない、そこで評価を受け20年以上町の経営者を務めることができる人はそうはいない。なんでも20代で町長になることを決め、町議２年で選挙に勝利。

仕事の内容は実に戦略的だ。学ぶことが多すぎる。減り行く人口に消滅市町村と名前を挙げられ大いに危機感を煽られ、自然増がままならない中、首都圏からの移住による社会増を目指し、そしてふるさと納税では富の分捕り合戦が激しさを増してきている。

この場面では特に首長の手腕が試され、ここ10年で大きな差がついてくると思っている。みやき町長率いるみやき町には大いに刺激を受けた。いくつかはパクるつもりだ。

来年の今頃には小山町で必ず形を見せたい。（つづく）